

視察報告書

委員会名	総務文教常任委員会
視察日時	平成30年10月23日(火) 13時30分～15時30分
視察先	静岡県牧之原市
視察項目	対話による市民との協働のまちづくりについて
視察参加議員	井上健作、波多江貴士、堀田勉、藤井芳広、重富洋司、川上伸悟

視察概要

牧之原市の概要

面積：111.69 km² 人口：46,119人 世帯数：16,769世帯(H30.5月末)

誕生：H17.10月11日に相良町と榛原町が合併し、牧之原市へ。

地理的環境：静岡県中西部、駿河湾の西端に位置し、静岡市より約33kmの距離にある。

合併後、最大51,000人いた人口も減少の一途。初代市長の「市政への市民参画と協働の推進」という公約のもと、市民との対話の場を設けるも、当初は上手くいかなかった。その後、この失敗をばねに「対話のまちづくり」先進地となった状況について調査を行った。また、本市としても最重要の計画である、長期総合計画策定や公共施設マネジメント基本計画における市民協働についても、併せて調査を行った。

I. 対話による協働のまちづくりについて

① 取組みの概要

(1) 経緯

《H18 検討期》

- ・市長公約の中で「市民参加と協働を推進」を掲げ、『フォーラムまきのはら』を開設。
⇒当初は多くの市民が参加する検討の場となったが、回を追うごとに参加者減。
理由は「1人だけ話す・頭から否定・楽しくない」。

《H19 試行期》

- ・市長マニフェスト検証大会を始め、引き続き対話の場を創出。試行錯誤により市民ファシリテーターの養成を開始。

《H20 育成期》

- ・ファシリテーションを活用した手法を定着させる。運営を担う人材を育成。
⇒「まちづくり協働ファシリテーター養成講座」「協働推進リーダー育成」開始。

《H21 実践期》

- ・ファシリテーション実践の場・地域住民の対話の場として『男女協働サロン』開催。

《H22-23 協働バージョンアップ期》

- ・市民が中心となり、「牧之原市自治基本条例」を制定(H23.10月施行)。
・「牧之原市政への市民参加に関する条例」(H26.10月施行)

(2) 活動の中心である『男女協働サロン』の確立

⇒老若男女を問わず、誰でも参加できる話し合いの場。住む人で地域の課題を解決する。

モットー：気軽に・楽しく・中身濃く

ルール：自分ばかり話しません・頭から否定しません・楽しい雰囲気を大切にします

② 取組みの成果

(1) 市民と市職員で「津波防災まちづくり計画」の策定

- ・H24：5地区で男女協働サロン開催(5地区×10回の計50回)。
- ・H25：5地区の整備計画策定。技術的検討も地元住民が参加。
- ・H26：県と一緒に、命を守る防潮堤検討を開催(3回)。

⇒9箇所の避難タワーや避難ビル、防災公園、いのち山などここ3年で32施設完成

(2) 地域の絆づくり事業(H24～)

目的：地域課題の発見と解決に向けて取り組むことを通じ、自治会をはじめとする各種団体の連携や組織の構築、合意形成の仕組みづくりとともに、協働のまちづくりを進める人材を育成すること。

- ・牧之原市地区自治推進協議会(地区長会)の元、10地域において「地域の絆づくり事業推進委員会」が結成され、地域づくり計画を策定。

(3) 第2次総合計画 前期基本計画(H25～)

意見交換会：福祉、教育、産業、生活基盤、女性、行政経営、企業若手、金融機関の8分野で『現状と課題、住みたいまちの姿』について17回のワークショップを開催。173団体513人が参加。

市民意識調査：『市民の満足度、重要度』について1,400人を抽出、988人が回答。

⇒上記に、行政の意見を加え、さらに大学教授や市内の代表でつくる「総合計画審議会」が内容を確認し、『市民討議資料』が作成される。その後、計画策定市民会議(NEXT まきのはら)で揉まれ、総合計画原案が作成された。計2,000人以上の市民が参加した。

(4) 市民との対話の中で進める「公共施設マネジメント基本計画」の策定(H27)

- ・第1回(9/9)：総論に対する共通理解・問題意識の共有
- ・現地視察(9/29)：市内の公共施設の現地確認
- ・第2回(10/8)：各論に対する共通理解・問題意識の共有
- ・第3回(10/23)：施設と機能の分離とニーズの満たし方の発想
- ・第4回(11/17)：分野別取組の方向性の検討と取組イメージの明確化
- ・第5回(12/17)：取組の方向性の磨き上げと先導的な施設の抽出

⇒「行政・文化施設」「学校・体育・子育て施設」「コミュニティ・公園施設」

「保健福祉・観光産業施設」の4カテゴリーで、市民メンバーと市職員メンバーとの対話の中で計画を築き上げていった。

■先導的施設に位置づけされた旧片浜小学校の活用(H29)

※旧片浜小学校…相良・榛原の中間に位置し、海・山・里の豊かな自然に囲まれたエリアにある。H11に建築された市内で最も新しい学校施設であるが、児童数の減少によりH29に閉校。

⇒『100人ワークショップ』にて、“こんな使い方があったら楽しくなるね”というコンセプトの基、「体験ものづくりの拠点」「カフェのような雰囲気で人が集まる場所」「理科教室や体験学習ができる場」「商業利用」等の方針が定まる。その後、民間の運営業者を選定し、H30.5月にオープンフェスが開催されるなど活用が進んでいる。

(5) 地域リーダー育成プロジェクト(H27～)

目的：地元高校生と市や県立大学などが連携し、地域に愛着をもって課題解決に貢献する人材を育成する。

⇒今年度は、7回の「学び合いの場」を経て成果報告の発表が行われる。

高校生：①地域を知り、理解を深め、地域課題について考え行動する。

②自分の将来や自分自身についての考えを深め、他社との関わり方や他者への考えを深める。

大人(地域の方・市内企業や団体・市職員)

：①話し合いの中で高校生から提案された地域課題について、それぞれの立場から可能な範囲で協力。

②話し合いと実践の中で、大人の立場から地域の課題解決へ関わる。

③課題・問題点

協働のまちづくりという理想は「失敗」から始まった。先進地と呼ばれるまで、十数年の試行錯誤があった。

市民満足度・人口増・投票率上昇等、現段階においては、明確な数値の好転は見られていない。無論、長期的なスパンで成果が出てくるものと思われるので、将来的な成果に期待したい。

本市にとって活用すべき事項や課題

人口規模が異なるため、難しいケースもあるかと思うが、市政への市民参加や、関心を高めるため、そして何より市民満足度を高めるために「対話による市民との協働のまちづくり」の導入は有効と考える。

本市でも「高校生未来会議」を実施したように、特に高校生から市政に問題意識を持ち、実際に課題解決に挑み・試みる経験は、将来の糸島市の財産になっていくと考える。

糸島市長期総合計画策定のため、本市においても「まちづくり市民委員会」がスタートしたが、上記の高校生未来会議と同様、プロのファシリテーターが会の進行を務める。牧之原市と同様に、育成に時間がかかるが、「より話しやすい雰囲気の醸成」「事前の密な打ち合わせ」「市民の“生”の意見を得る」というメリットを享受するために、市民ファシリテーターの育成を検討すべきと考える。プロにお願いするより、費用の節約というメリットもあると考える。

公共施設マネジメント基本計画に関しても、実際に施設の統廃合等には、市民の理解と協力が必要になってくる。長期間に亘る、また生活に直結する重要な計画だからこそ、多くの市民の皆様に、来たるべき未来を提示し、真剣に議論していただく機会を丁寧に創出していくことが市民満足度の向上につながると考える。